

提言 アートをあきらめない仕組みづくり：ケアマネジメントを用いたアーティスト支援の新たな視点

奥山, 理子
みずのき美術館：キュレーター

タカハシ, 'タカカーン' セイジ
すごすセンター（障害福祉サービス）・すごす/センター/家/AIR運営

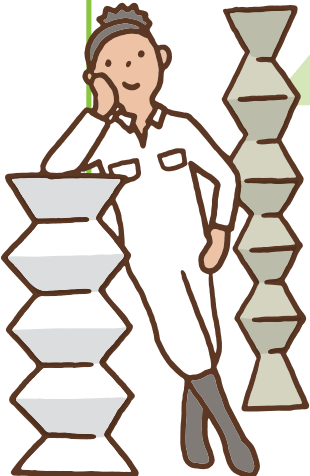
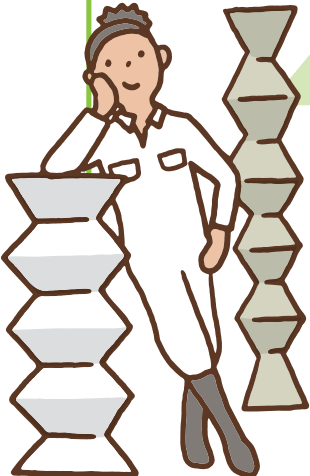
長津, 結一郎
九州大学：教員

松岡, 真弥
Mapino Front：代表

<https://hdl.handle.net/2324/7358419>

出版情報：pp. 1-11, 2024-03-20. 九州大学大学院芸術工学研究院長津研究室
バージョン：
権利関係：©2024 ケアまねぶ





提言

アートを あきらめない 仕組みづくり

ケアマネジメントを用いた
アーティスト支援の
新たな視点

ケアまねぶ



アーティスト支援に関する環境は、ここ数年で急速に変化している。芸術業界における不均衡な関係性により、多くのひずみが生まれている。一方、国や地方自治体は、アーティスト向けの支援窓口を設置するようになってきた。ただ、このような支援は、アーティストをめぐる課題に根本的に応答できているのだろうか。

いま求められているのは、制度や社会的潮流に基づいた支援だけではなく、アーティスト自身の、顕在化した／もしくは潜在的なニーズに基づいたサポート体制の構築ではないか。

アーティストがどのような状況におかれ、真に求めていることは何か。アーティストと、アーツマネジャーをはじめとした周囲の人々とは、どのように平等で公正な関係性を編むことができるのか。

この問題に対し、リサーチ・コレクティブである「ケアまねぶ」は、「ケアマネジメント」の仕組みを応用することを提案し実践してきた。これは、社会福祉の分野において制度化されている、個人の「尊厳」や「自己決定」を保障し適切なサービスの選択ができるように支援する仕組みのことである。

2年間の取り組みを基に、アートをあきらめない仕組みづくりに向けた第一歩となるものとして、この提言はまとめられた。アーティストのキャリアが安全に育まれ、その活動プロセスにおける悩みや不安、そして喜びを分かち合えるような、未来の社会をつくるきっかけとして、この提言が役割を担うことを願っている。

ケアまねぶとは

福祉・芸術分野の研究や実践をするメンバーによって構成されているリサーチ・コレクティブ。これまで、それぞれの現場で出会ってきた事象への問題意識をもとにして、芸術分野に広がるハラスメントの課題などに対して問題意識を共有してきた。2022年1月ごろより定期的に集まり始め、福祉制度の芸術現場への応用を模索するような議論を重ねてきた。

メンバー

❖ **奥山 理子** みずのき美術館キュレーター、Social Work / Art Conferenceディレクター

❖ **タカハシ 'タカカーン' セイジ**
すぞすセンター（障害福祉サービス）・すぞす / センター / 家 / AIR運営、アーティスト、介護福祉士

❖ **長津 結一郎** 九州大学教員【アーツマネジメント、文化政策】

❖ **松岡 真弥** Mapino Front代表、アーツオーガナイザー、キャリアサポート

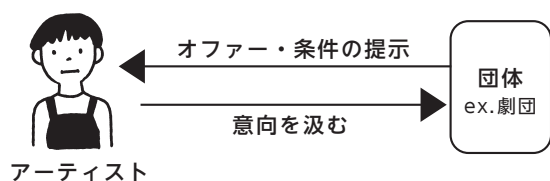
アーティストへのケアマネジメントのイメージ

多くのアーティストにとっては、制作にまつわるあらゆることを、自分で判断・管理することが前提となっているだろう。だが活動を継続するためには、他者からのサポートに頼ることや、必要な社会資源（情報やツールなど）に接続することも不可欠である。「自立／自律」とは、一人で全てを行えることだけではない。アーティストという「個」にばかり才能の発揮を頼るのではなく、ケアマネジメント理論を応用し、アーティストと支援者が対等に支え合える仕組みをつくることで、より安心して作品制作に励むことができるのではないか。

アーティストと創造環境の相互作用にはたらきかけるケアマネジメント

団体に所属している場合

≫主従関係が生じやすい

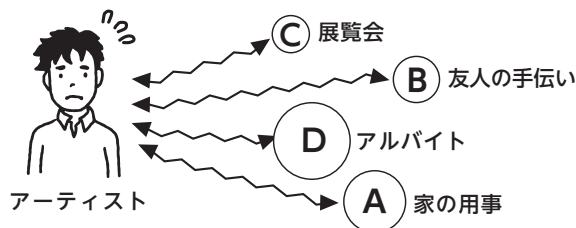


≫お互いのニーズを充足させる関係



フリーランスの場合

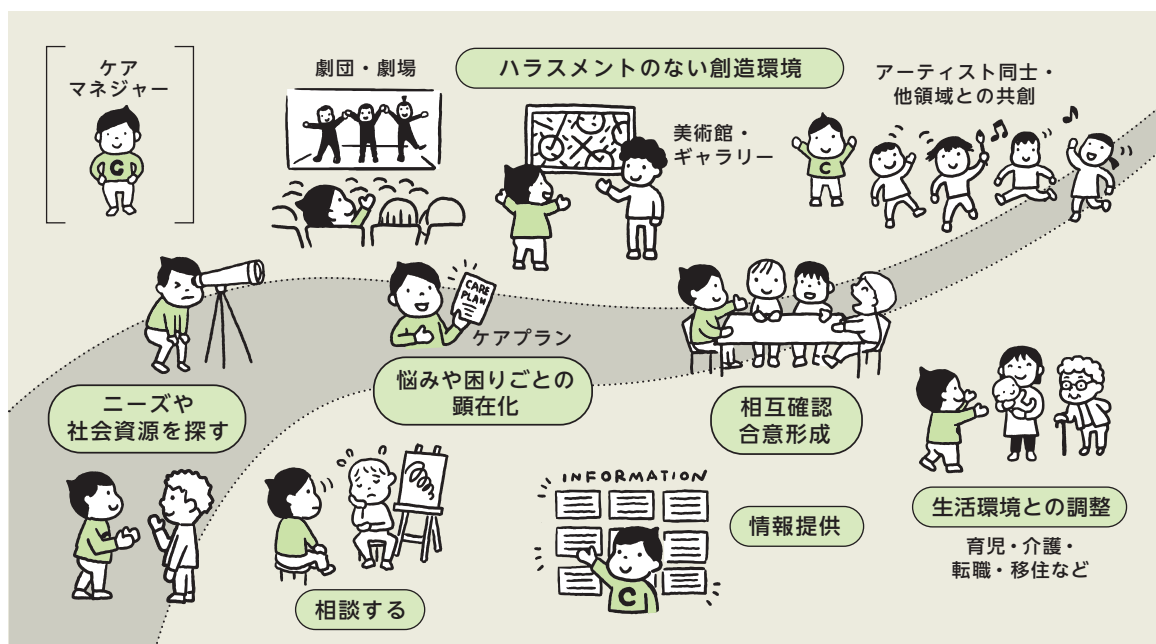
≫外部環境に翻弄されやすい



≫本人に合った整理・環境調整をする



アーティストへのケアマネジメントが実装され、
文化芸術に関わる人がそれぞれに活躍できている社会のイメージ



2022年度

ケアまねぶで活動を始めるとき、まずは、異なるジャンルで活動するアーティスト2名に対するケアマネジメントを試行することにした。1名のアーティストに対してケアまねぶのメンバーが2名ずつグループになり、アセスメントやケアプランの策定を試みた（具体的な内容はp.6-8を参照）。

2023年3月5日（日）には、こうした活動の報告の場として、京都市内で公開研究会「アーティストとのアセスメントから見えてきた」を開催。福祉の現場と芸術支援の現場からそれぞれゲストを招いて議論を行った。

Arts Aid KYOTO ～京都市 連携・協働型文化芸術支援制度～の支援を受けた
（「若手芸術家キャリアの包摂的形成に向けたアクションリサーチ」として）



2023年3月5日（日）公開研究会 撮影：中谷利明

2023年度

新たにアーティスト1名に対し、ケアまねぶ2名でグループになりケアマネジメントの実践に取り組んだ。また、昨年度にケアマネジメントを試みたアーティストに対し、その後の活動について追跡しさらなる支援の方向性を模索するために、モニタリングを実施した。

また、一般社団法人HAPS (Social Work / Art Conference) との企画で、若手アーツマネジャーへの伴走支援を行う事例や、アートと福祉を架橋する試みについての勉強会も企画・実施した（7・8月）。11月には九州大学の授業「アーツマネジメント論」でのゲストスピーカーとして話題提供したほか、福岡市でのアーティスト支援の拠点でのトークイベントを実施、医療や文化政策の立場から多様な意見が交わされた。

こうした活動の成果として、本提言「アートをあきらめない仕組みづくりーケアマネジメントを用いたアーティスト支援の新たな視点ー」が制作された。2024年3月20日（水・祝）には京都市内で公開研究会「アートをあきらめない仕組みづくり」を実施した。

公益財団法人セゾン文化財団の「次世代の芸術創造を活性化する研究助成」の支援を受けた
（「芸術の現場にケアマネジメントの仕組みを導入することによる新たな芸術家支援システムの構築」として）



2023年11月21日（火）福岡でのトークイベント

このページでは、福祉において「ケアマネジメント」がどのようなもので、そこにいかなる意義があるのかを、「最新 社会福祉士養成講座 精神保健福祉士養成講座 12 ソーシャルワークの理論と方法 [共通科目]」（中央法規、2021 年）の内容を要約することにより解説する。

1 ケアマネジメントの意義と基本的な原則

ケアマネジメントの意義は、ケアマネジメントの利用者（以下、利用者）が自らの生活をコントロールし、地域社会で生き生きとした日常を送ることができるよう支援することにある。この支援により、利用者は生活の「主人公（主体者）」としての自覚を持ち、自立と自律を実現することができる。ケアマネジメントは、利用者が自らの社会資源を選択し（自己決定を行い）、適切な QOL を保持しながら、地域で主体的に生活するための支援を提供する。利用者が生活の主人公として自立し、自律することを支援するための重要な枠組みである。その中において、ケアマネジャーは利用者の生活の質を向上させる上で不可欠な存在である。

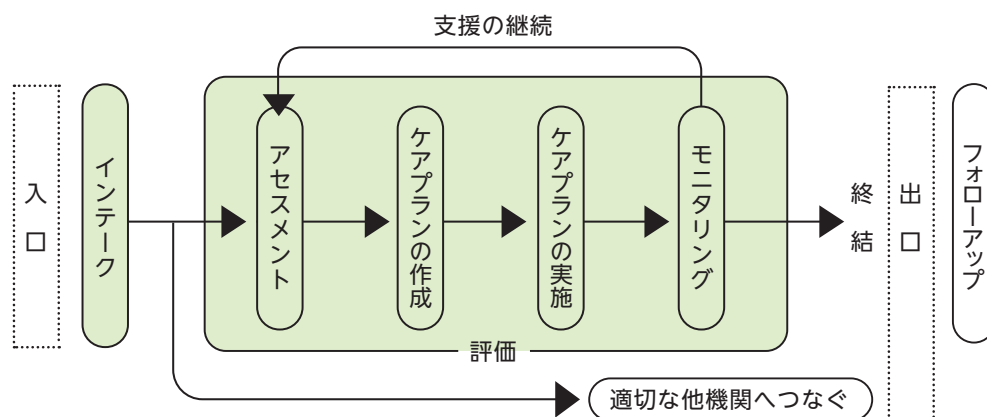
ケアマネジメントの原則は、利用者の生活全体を捉え、焦点を利用者の肯定的な面に当てることが重要である。人々は大切にしていることや得意なことなど強みとなる部分を持っており、そこに焦点を当てることで、より良い支援が可能となる。さらに、利用者自身が支援の主人公であり、自らの生活をコントロールする権利を持っていることを認識することが重要である。そして、ケアマネジャーの主な活動の場は地域社会であることを忘れてはならない。利用者の生活は地域と密接に関連しており、地域のリソースを活用しながら支援を行うことが必要である。

2 ケアマネジメントのプロセスの全体像

ケアマネジメントは利用者のニーズを適切に把握し、支援を計画・提供するための包括的なアプローチを提供する。

- ① インテーク ———— 利用者がケアマネジメントサービスを受けるための受付
- ② アセスメント ———— 利用者の現状やニーズを理解するために利用者やその家族と協力して実施
- ③ 契約 ———— 支援の目標や計画の明確化
- ④ ケアプランの作成 ———— アセスメントの結果に基づいた支援目標の設定と支援計画の作成
- ⑤ ケアプランの実施 ———— 社会資源の活用開始
- ⑥ モニタリング ———— 利用者の生活状況や支援効果の評価と調整
- ⑦ 評価・集結 ———— 提供した支援の効果の検証

ケアマネジメントにおけるプロセス（作成：ケアまねぶ）

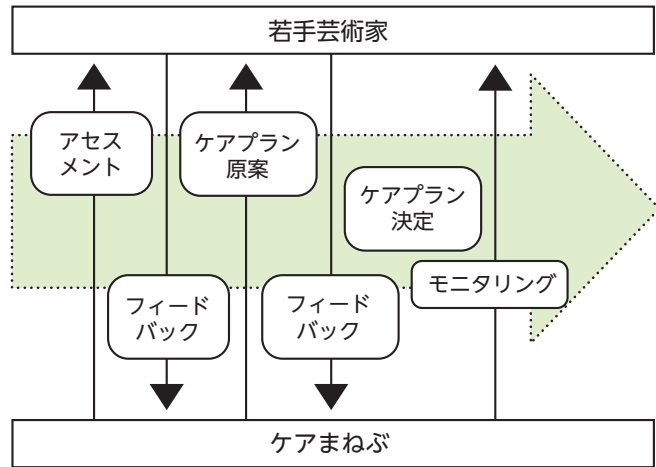


ケアマネジメントのアーティストへの応用

ケアマネジメントの理念はアーティストの領域に適用することが可能か、という仮説に基づき、ケアまねぶは、どのようにしてケアマネジメントのシステムをアーティストに対して応用するべきかを検討する。

プロセス

アーティストに対し、福祉分野と同様に、「アセスメントシート」を用いたアセスメントを行い、フィードバックを受けて同シートに記載した内容を修正する。次に、「ケアプランシート」を作成し、再度提案とフィードバックを得る。すべてのプロセスをアーティストとケアまねぶによる共同作業で制作することを重視した。ケアプラン作成後に、アーティストが一定期間活動を行なった後、モニタリングを行う。



アセスメントシートについて

アセスメントシートには、生活基盤、健康、日常生活の様々な側面、コミュニケーションスキル、社会参加、教育、就労、家族関係など、幅広い領域をカバーした項目がある。また、本人の願いや困りごと、ストレングスなども考慮され、個々のニーズに焦点を当てたアセスメントが行われる。ケアまねぶでは、この中でアセスメントに活用する項目を選別したうえで、アート活動や社会資源へのアクセス、他のアーティストやスタッフとの関わりなどを追加することにした。

ケアまねぶのアセスメントシートの構成

アセスメント結果				
生活基盤に関する領域 ・経済環境 ・住環境	健康に関する領域 ・服薬管理 ・食事管理 ・病気の留意 ・体力等	日常生活に関する領域 ・起き上がり ・衣服着脱 ・書類の整理等	コミュニケーション・スキルに関する領域 ・意思表示の手段 ・パソコン ・電話の使用等	アート活動と社会資源 ・表現方法と変化 ・表現活動を行う上での障壁（過去） ・表現活動を行う上での障壁（現在） ・他のアーティストやスタッフとの関わり ・趣味 など
社会生活技能に関する領域 ・対人関係 ・屋外移動 ・金銭管理	社会参加に関する領域 ・レクリエーション ・趣味・旅行 ・当事者団体の活動等	教育・就労に関する領域 ・教育 ・就労	家族支援に関する領域 ・家族	
本人の訴え（願い・困りごと）				
本人のストレングス（個人・環境）				
応対者所見				
点線① 今回のアセスメントで採用しなかった項目 点線② 今回のアセスメントで採用した項目 太線 既存のアセスメントシートから変更・追加した項目				

ケアプランシートについて

アセスメントシートを元にケアプランシートを作成する。既存のケアプランシートには課題解決や支援目標、福祉的サービスの提供方法、本人の役割、援助の方針、そして希望する生活の実現に向けた目標が項目立てされている。アーティストとのケアプラン作成にあたってこの方針を生かしつつ、既存のケアプランが「福祉的サービス」への接合を目指しているのに対して、「文化的サービス」を提案し、芸術の拠点や相談窓口へのアクセスを奨励する。

ケアまねぶで用いたケアプランシートの構成

利用者及びその家族の生活に関する意向（希望する生活）			
総合的な援助の方針			
長期目標・短期目標			
解決すべき課題 （本人のニーズ）	支援目標	達成時期	文化的サービス等 [種類・内容・量（頻度・時間）]
課題解決のための本人の役割		評価時期	その他留意事項
点線 実際の 今回のケアプランで採用した項目 太線 既存のケアプランから変更・追加した項目			

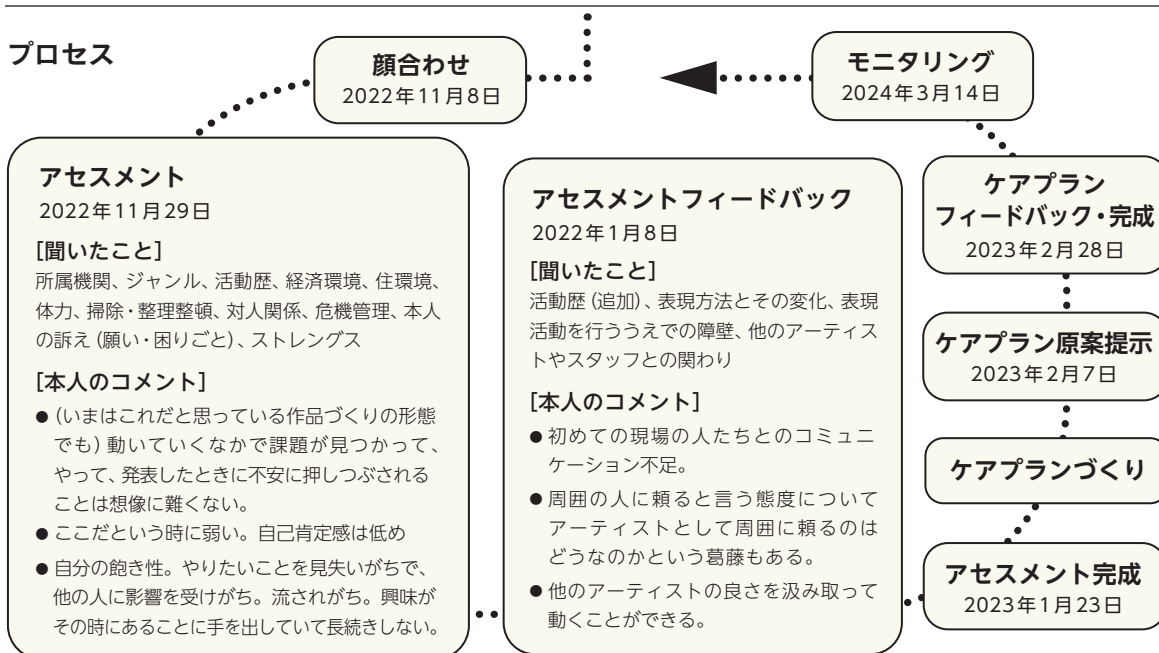
CASE 1

担当 | 長津結一郎、松岡真弥

Aさん

20XX年、美術大学卒業。在学中は陶芸を専攻。当時、師事していた美術家に影響され、インスタレーション、パフォーマンス、舞台美術の分野に関心を持つ。卒業7年後に初個展、その後も展覧会に出展しながら、舞台美術、大道具、インストーラーの仕事などをフリーランスで行っている。

プロセス



Aさんのケアプラン（要約）

≫総合的な援助の方針

ケアまねぶ ご本人のニーズに応じて、アーティスト支援窓口の紹介や情報提供、事例紹介

ご自身 自己理解を深め、ケアプランをもとにした行動ができるようになることを推奨

→本人の関心事に意識が向けられ、ニーズや目標が整理される

≫長期目標

- ケアマネジメントを経て自身の中で見極めた強みを活かしたアーティスト活動を行えるようになる。
- 創作活動を続けていくうえでの不安が解消され、確信をもった行動ができるようになる。
- 作家としての長期的ビジョンが持てるようになる。

≫短期目標

- 創作活動を行う際の不安を解消する手段を自分で工夫できるようになる。
- 個人での創作活動を行ううえでの関係者とのコミュニケーションが円滑に行くための工夫ができるようになる。

担当者コメント

Aさんと担当者の1名が知人関係にあったことで、経済環境などの個人的な事柄を何うのを躊躇したり、事前に知り得ることがある場合にどのようにニーズを捉えるかという点で迷いが生じた。ケアマネジメントの原則に即し、あくまでも本人が語った事実をもとに記述することとし、解釈や担当者の思い込みを混ぜないようにした。

アーティストとアーツマネジャーの間では、双方の立場やその時の状況に応じて、テーマを限定して話し合いが行われる。一方、短時間で行うアセスメントでは、立ち入った聞き取りを一旦飛びに、かつ網羅的に行うことができると感じた。

モニタリング結果 2024年3月14日

作成したケアプランを協働するアーティストに見せるなど、自身の課題を周囲の人に共有し、今までより深く相談をする機会が増えているとのことだった。「自分の中に疑問や違和感を溜め込まなくなっている」との報告に大きな変化が感じられた。個展やコンペ出展の挑戦を通じて、自身にとっての活動のフィールドや評価軸を確かめることにつながっている。課題やニーズを徐々にクリアして、できることや考えることが増えた分、活発に動いている状況が伺える。次はセルフケアプランを立て、新たな課題を把握することを本人自ら望んでいる。

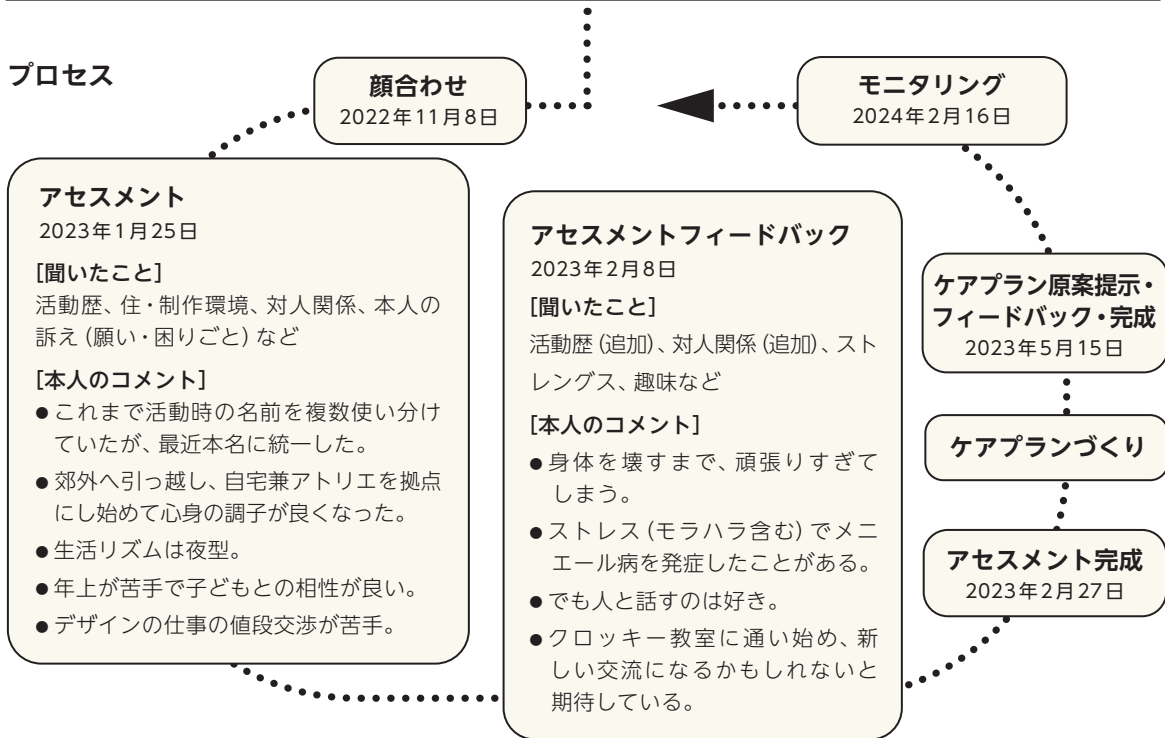
CASE 2

担当 | 奥山理子、タカハシ'タカカーン'セイジ

Bさん

美術系高校卒業後、美術系大学に入学。中退後、専門学校でインテリアデザインを学ぶ。これまで、ゲストハウス、保育所、障害児者の通所型事業所でのアルバイトを経験。現在はフリーランスとしてイラスト、グラフィックデザイン業を営む。フリーランス転身を機に、移住。自宅兼アトリエを不定期で開放し、ワークショップを行っている。

プロセス



Bさんのケアプラン(要約)

≫希望する生活

- 自分に合った生活環境や活動内容を、維持・継続することができる。
- アーティストとしてのアイデンティティを持って活動できるようになる。

≫総合的な援助の方針

- ご本人のニーズに応じて、アーティスト支援窓口の紹介や情報提供、事例紹介を行う。

≫長期目標

- 未熟なキャリア、フリーランス、性別などの理由で不利益を被ることがなく活動できる。
- 自分の特性に見合った適正な顧客を獲得できるようになる。
- 公私のバランスや、活動と休息のメリハリをつけるようになる。

≫短期目標

- 仕事の依頼を受ける際や対人関係で不安がある場合に、第三者に相談ができる。

担当者コメント

日頃から考える習慣があるとみられ、活動の変遷やその時々的心境の変化をうまく言語化できている。また、新天地での生活が合っており、現在大きな悩みを抱えている状態ではなく、この生活の継続がポイントになりそうだ。仕事を受ける際の条件を整理したり、良好な健康状態が維持できるよう、部分的なサポートが効果的ではないか。

モニタリング結果 2024年2月16日

ケアプランをさほど意識していなかったとのことだが、結果的にはBさんが取り組む課題に対して日々調整を行いながら達成に向かっていくことを確認することができた。まだ業務量・収入ともに安定した仕事のペースを作る途上だが、着実に自身で環境調整能力を高められている。プライベートでも活動領域が近く、気の合う仲間が増えてきていることも本人の支えとなっている様子を感じられた。

Bさんの感想

ケアまねぶとの対話を通して自身の体験や考えを言語化できたことで、すごく助かった。

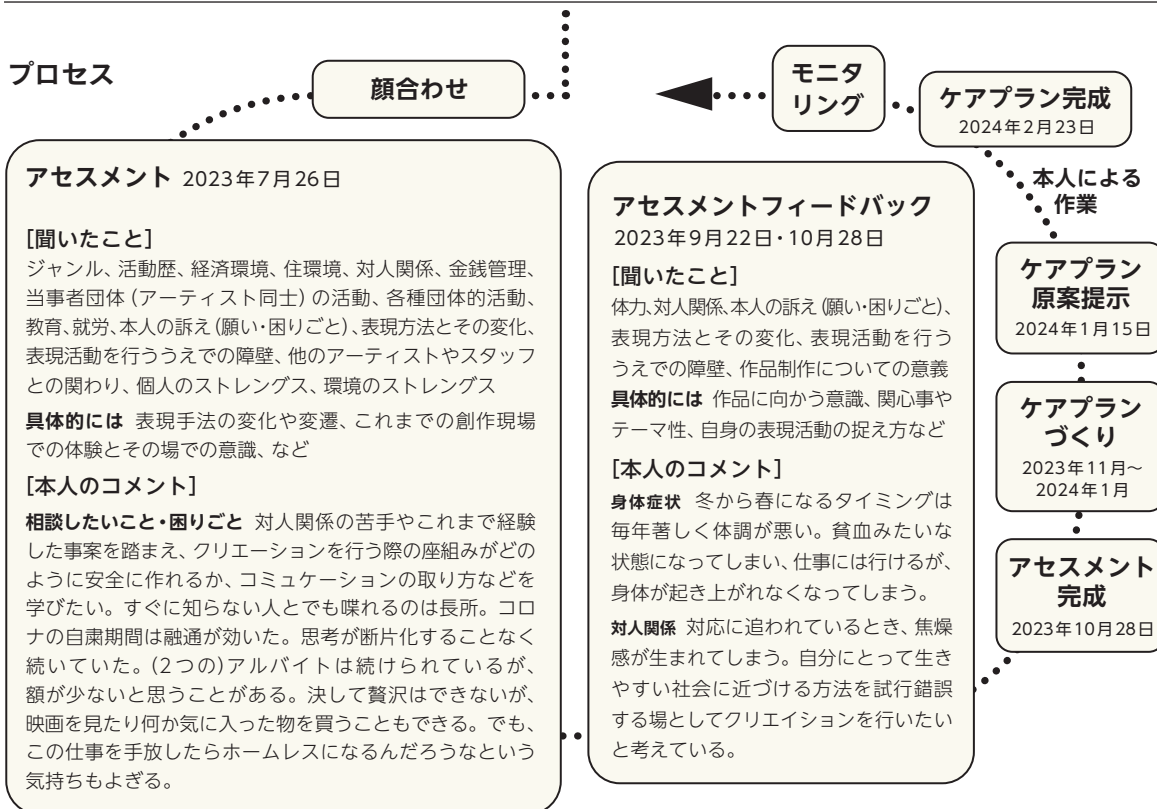
CASE 3

担当 | 長津結一郎、松岡真弥

Cさん

20XX年、芸術系大学卒業。在学中は舞台芸術を専攻。バレエ・ダンスから演劇の分野に関心を持ち、卒業後も継続して活動。フリーランスとして団体を主宰し上演を行いながら、飲食と事務のアルバイトで生計を立てている。

プロセス



Cさんのケアプラン（要約）

≫希望する生活

- 作品発表につながるリサーチや制作を続けていたい。
- 制作を続けるために軸となる視点を持っていたい。

≫総合的な援助の方針

- リサーチや制作を進める上で、客観的目線の伴走者（ドラマトウルク、演劇制作、俳優など言葉の壁打ちができる役割の人）との連携を促す。
- 活動にあった仕事の仕方を探せるよう、スキルと可能性を掘り下げていく。

≫長期目標

- 気疲れしないコミュニケーションや交渉の方法、安全なクリエーション方法を身につける。
- 自身の立ち位置を掴むための視点やツールをもつ。

≫短期目標

- 目上や新たに組む人との間に有効なコミュニケーション方法を学ぶ。
- ハラスメント予防について知識を得る。

担当者コメント

アセスメントの場がどのような場で、どう応じるのがふさわしいかCさんが配慮している様子があった。言葉選びに慎重であり、言葉に重きを置いて考える傾向が強く見受けられる。またオンライン面談であることが、本人にとって心地悪さを誘発しているかと判断し、3度目からは対面でリサーチを実施するように切り替えた。

1回目のアセスメントで「年上とのコミュニケーションは気疲れしてしまうため苦手」と本人が答えており、ケア

まねぶのアセスメント自体がその状況にあったこと、またオンラインでは「真空状態のように言葉が伝わってくる」と本人の感想が伝えられたことから、アセスメントの形態を検討した次第。

アセスメントでは、質問項目から本人の中で新たな問いが立てられ、創作やリサーチにつながる関心事へと話題が結び付けられることがたびたびあった。ケアまねぶとの間で交わったようなやりとりを続けていきたいとの希望が挙がった。

福祉分野へのフィードバックも期待

福祉現場に近接する領域で文化芸術活動を行うようになり約15年が経過した。私は活動初期から、企画展などで知的な障害のある人々の作品を扱う際、現役の芸術家たちへ協力を仰いできた。芸術家らとともに作品を考察することで、キュレーターや研究者だけでは得られない制作時の感覚を想像することができ、作品分析の手がかりを得てきたのだ。私にとって障害のある表現者を知ることは、同時に今を生きる芸術家らを知ることであった。

こうして交流が深まると、彼ら彼女らから悩みが打ち明けられることもしばしばあり、中には、困りごとに対して具体的な手立てでサポートすることもあった。その都度思い知らされるのは、芸術家にとって安心して悩みを打ち明けられる場とその解決策の少なさだ。私のすぐ隣（福祉現場）では、日夜ケアマネジメントが繰り返されている。これを参照しない手はないのではないかと思い始めた矢先、このケアまねぶの活動が始まった。

現時点では、まだケアプランを作ってみたという段階に過ぎず、ケアマネジメントを実施できたとはまでは言えないものの、この間に対象となった芸術家らとともに、それぞれが置かれている状況と描きたい未来のための言葉を尽くしたことで見えてきたことは多い。これは今後、ケアの分野へもフィードバックできるのではないかと期待している。芸術家らのニーズは、福祉における要援護者のニーズにも通じ、そのためのチームアプローチもより多様な領域から関わるのが可能ではないだろうか。これまで「表現すること」で繋がりを見出してきた福祉と芸術だが、より踏み込んだ相互関係が始まる予感がしている。

奥山理子 みずのき美術館キュレーター、Social Work / Art Conferenceディレクター

母の仕事で幼少期より福祉施設でのフィールドワークが日常化。2012年みずのき美術館の立ち上げに携わり、以降企画運営を担うほか、2019年よりHAPSの「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」にディレクターの1人として参画。

作品の作られ方が変わる予感

安心して作ることは「悪い」ことで、作品は「ひとり」で作られるもので、アート活動を本業とすべきである。と、誰が決めたのか。アーティスト自らが本心でそう思うのなら、もちろんそれは止める権利はないが、そのような像を勝手に求めるのは本人ではなく人や環境だった場合、それは暴力であり無責任である。たとえそんな極端な例でなくとも、周囲がアーティストにアドバイスをし、その通りにアーティストが動かなかつたら、なぜ自分の言うことを聞かないのかと責める、アドバイスした通りにアーティストが動いたとしても期待通りの成果に達しなかった時、本人の努力不足だと断罪する、そのような体験は思い当たる人が少なくないはずだ。また、相談に乗る側は傾聴に徹するべきなのか。傾聴そのものは大切な行為（そして難しいもの）だが、そのみを強いられるというのも酷だ。

大切なのは、「本人とともに」言葉を探し、社会資源を見つけていくその共同性で、それがケアマネジメントの極意であり、喜びも苦労も分かち合う仕組みである。

安心して、他者から競争を強いられることなく作られた作品はどのような形をしているのだろう。それを眺める私は、真っ直ぐに作品と向き合うことができる。

タカハシ 'タカカーン' セイジ

すぞすセンター（障害福祉サービス）・すぞす / センター / 家 / AIR運営、アーティスト、介護福祉士

障害福祉分野での表現に出会い衝撃を受け、創作支援を行う福祉現場を渡り歩きながら、並行してアート活動を行う。福祉と芸術が混ざり合う場でうまれた感動や葛藤を胸に「福祉施設」設立を願い続け、京都市内にて運営を開始したばかり。

アーティストとともに未来に向かうために並走を

アートプロジェクトのことを耳ざわりの良い言葉で語る一方で、特に若手で女性のスタッフのことをモノのように扱うアーティストやプロデューサーに出会ったのは、マネジメント経験の少ない私ですら1度や2度ではない。その一方、大学教員という権力性を持ってしまった自らが、学生に対してそのような構造を再生産してしまっていると感じることもある。

ケアまねぶの活動は私にとって、そのような意味で他責の時間でも自戒の時間でもある。と同時に、実際にケアマネジメントの視点を持ってアーティストと対話することを試みる体験をすることは、作品やプロジェクトに向けてアーツマネジャー、もしくはドラマトウルクとして並走するのはまた異なる、アーティストとの付き合い方を試す時間でもあったと感じる。

今回の活動でたびたび考えたのは「潜在的なニーズ」という言葉である。アーティストが「今」困っていることではなく、本質的に何を課題に感じ、何に向かおうとしているのかを、対話を通じて共に掘り起こしていくこと。その行為に光を当てることは、アーティストのケアに向けた可能性を持つだろうし、それと同時に、アーティストの持つ潜在的な力を、より社会に向けてひらくための道筋をつくることでもあると感じた。ケアまねぶは、アーティストとともにあり得るべき未来を考えるきっかけをつくる、スペキュラティブなプロジェクトであったといま改めて感じている。

長津 結一郎 九州大学教員〔アーツマネジメント、文化政策〕

多様な関係性が生まれる芸術の場に伴走／伴奏する研究者。ワークショップに関する教育、芸術作品のマネジメントやプロデュースにも関わる。著書に『舞台の上の障害者：境界から生まれる表現』（九州大学出版会、2018年）。

制作体制への協力から、アーティスト自身のケアの模索へ

ケアまねぶの発足にあたってケアプランを作成する目的を考えた時、アーティストにとってアセスメントはCV（履歴書）、ポートフォリオ（作品集）と並ぶコミュニケーションツールの作成につながると仮定した。アセスメントを、ワークショップやオーディションに代わる自己紹介／自己PR手法の一つとして用い、これまでのキャリア（活動歴）や生業（作品制作以外の仕事・アルバイト）、鍛錬方法や暮らしの習慣等の一部を表出する。その過程から作品のテーマや、舞台上の役柄等を生み出すことができるのではないかと考えたのだ。しかしリサーチを進めてみると、創作のためだけでなく、ケアプランの活かし方自体をアーティストとともに探ることになると気付いた。

アーツマネジャーの視点から考えると、初めて関わるアーティストと出会う際にアセスメントができれば、シャドウワークのように行う事前の下調べや、制作合間の短い問答に代えて、直接のヒアリングを介して並走ができる。

今後の活用に向け、個人的には他のカウンセリングやコーチング手法との比較、スポーツトレーナー・インストラクターなど、個々のスキル・パフォーマンスを持続させる方法との類似点／相違点の提示を検討したい。また、アーティストならではの幅広い活動に見合ったケアプランが立てられるよう、文化的サービスや資源をさらに見出していきたい。

松岡 真弥 Mapino Front 代表、アーツオーガナイザー、キャリアサポート

身体表現のマネジメントを中心に、劇場制作、アートスペース／アートプロジェクトの事務局運営等、ジャンル横断する創作の場づくりと上演展示に携わる。現在は文化芸術に関わる人材のサポートとキャリアコンサルティングを試行中。

資料

京都市情報館より (<https://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000167348.html>)

(様式) アセスメント表 (平成 27 年 9 月 1 日改訂版) (DOC 形式, 77.50KB)

(様式) サービス等利用計画, モニタリング報告書 (平成 30 年 4 月改訂版) (XLS 形式, 104.50KB)

参考文献

「最新 社会福祉士養成講座 精神保健福祉士養成講座 12 ソーシャルワークの理論と方法 [共通科目]」(中央法規、2021 年)

提言 アートをあきらめない仕組みづくり

ケアマネジメントを用いたアーティスト支援の新たな視点

編 ————— ケアまねぶ

執筆 ————— 奥山理子 (p2、p7)

タカハシ 'タカカーン' セイジ (p2、p4、p7)

長津結一郎 (p1、p4、p5、p6、p8)

松岡真弥 (p6、p8)

写真 ————— 中谷利明 (p3)

デザイン・イラスト ——— 田中里佳 (mofudesign)

助成 ————— 公益財団法人セゾン文化財団

発行日 ————— 2024 年 3 月 20 日

発行 ————— 九州大学大学院芸術工学研究院長津研究室
〒815-8540 福岡県福岡市南区塩原 4-9-1
TEL 092-553-4648
WEB <https://ynagatsu.com>

©2024 九州大学大学院芸術工学研究院長津研究室

©2024 ケアまねぶ

ケアまねぶ caremanebu@gmail.com

公益財団法人セゾン文化財団